

(外国語活動)

楽しい外国語活動

～ 英語大すき！みんな大すき！自分大すき！ ～

大阪市立田島小学校 研修部

1 研究主題設定の理由

平成23年度に外国語活動が必修化され、本校でも5・6年生で英語活動に取り組んできた。しかし、高学年でいきなり英語活動をするよりも、低学年の時から徐々に英語にふれさせていく方が、より自然に英語に慣れ親しみ、滑らかに高学年の英語活動につながる可以考虑と考えた。

平成25年度から英語活動を研究領域とし、授業研究を中心に全校で実践に取り組んできた。本年度は、この2年間の研究の成果と課題を踏まえ、英語表現に慣れ親しみながらコミュニケーションすることの楽しさを味わい、外国の言葉や文化にふれ、その違いに気づき、より一層英語について理解を深めるとともに、互いの良さや違いを認め合い、自尊感情を高める活動のあり方を追究したいと考えた。

そこで、研究主題を「楽しい外国語活動～英語大すき！みんな大すき！自分大すき！」とし、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることを目指し、研究と実践に取り組んだ。

2 研究の内容

(1) 研究のねらい

- ① 英語を用いて、積極的にコミュニケーションを図り、楽しく活動できるようにする。
- ② 英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができるようにする。
- ③ 日本語と英語の違いに気づき、言葉や文化について理解を深めることができるようにする。

(2) 研究の視点

- ① 英語の楽しさを味わい、お互いのよさを認め合い、自尊感情を高める活動を工夫する。
- ② 高学年の外国語活動につながるように、1年生から6年生までの発達段階や系統性を考えた活動を工夫する。

(3) 研究の方法

- ① 授業研究会
 - ・低・中・高学年部で全体公開授業を行う。
 - ・研究推進委員会で指導案検討を行い、授業後、全体研究討議会を行う。
- ② 校内研修会
 - ・研究推進委員会を月1回実施し、研究・研修計画の企画・立案、研究の進め方について共通理解を図る。
 - ・外国語活動について理解を深めるため、校内研修会を実施し、各種講習会などに参加する。
- ③ 資料の整備
 - ・視聴覚教材などの指導教材や教具を収集・整備する。
 - ・各学年等で作成した資料を整理・保管し、次年度以降も活用できるようにする。

3 研究のまとめ

(1) 成果

- ① 英語を用いて、積極的にコミュニケーションを図り、楽しく活動できるようにする。

学級では、朝の会や終わりの会などで毎日の挨拶を英語でしたり、朝の放送や給食・掃除、全校朝会や児童集会時に英語の曲を使ったりすることによって、自然に英語に慣れるようにした。

ゲームやチャンツなどで相手がうまくできたときに“Good”、“Good job”などで相手を認め、それを伝えることでコミュニケーションが図られ、友だちのことを知り、自尊感情を高めることにつながった。5・6年生だけでなく、1～4年生でもC-NETを活用した。廊下で会うと、自分から進んで挨拶するなど積極的にコミュニケーションをとる姿が見られた。

- ② 英語の音声や基本的な表現に慣れ親しむことができるようにする。

「Hi, friends!」のデジタル教材やCDなどの音楽教材を使ってネイティブの発音を聞き、繰り返し発音させることを通して、英語の発音に自然に慣れていった。また、C-NETのネイティブの発音を繰り返し聞き話すことで、C-NETから適切な指導を受け、正しい発音に気づくことができた。

基本的な英語表現については、各学級の実態に応じて、ゲームやチャンツ、歌を取り入れることで、楽しく英語に慣れ親しむことができた。“Do you like～?”という表現を2～6年生を通じて取り入れた。2年生から6年生の間に、色・動物・果物・食べ物・スポーツ・教科など児童の実態や興味・関心、難易度など、各学年の発達段階と系統性を踏まえて、スモールステップで授業を組み立てることができた。

- ③ 日本語と英語の違いに気づき、言葉や文化について理解を深めることができるようにする。

ネイティブの発音に慣れ親しむことで、日本語と英語の違いを感じながら聞くことができた。英語の絵本やデジタル教材を使って、読み聞かせや視聴することを通して、日本語と英語、異文化との違いや共通点に気づき、理解を深めることができた。C-NETの国や故郷の紹介、ハロウィンの話などは、異文化にふれ合うよい機会となった。

実践全体を通して、Can do 評価を取り入れ、ふりかえりカードを工夫した。評価規準が明確になり、指導者の授業の組み立てや評価に生かすことができた。

(2) 今後の課題

- ① ほめる言葉やマジックワードを使ったが、ほめる言葉やマジックワードは他にもたくさんあるので、“Good”と“Good job”だけでなく、学年が進むにつれて、多様な表現を取り入れていく必要がある。
- ② 低学年のモジュール学習などを取り入れ、学年の発達段階と系統性をより考慮したカリキュラムを作成する。今後は、フォニックスなどを積極的に取り入れ、歌やジングルを通して、基本的な英語表現により一層慣れ親しむことができるようにする。